

『革命』 作…ポチ子

散らかった倉庫

佐藤 「うやあ、また皆散らかして。倉庫は綺麗に使ってって  
言ってるのに！誰が掃除すると思ってるのお、もう。」

佐藤、倉庫を掃除し始める。

リツ 「なあ、佐藤さんはなんで組織に入ったの？」

佐藤 「え？」

リツ 「革命って柄じゃないでしょ。」

佐藤 「ははっ・・・やっぱりそう見える？そうなんだよねえ、  
なんで入っちゃったんだろ。自分でもわかんないや。」

リツ 「佐藤さん、こんな犯罪者だらけの集団なんかと縁なさそ  
うな顔してるじゃん。何かきっかけでもあったの？」

佐藤 「それ褒めてる？貶してる？」

リツ 「褒めてるよ。優しそうな顔してるのになあっと思って。  
普通に生きようと思えば生きれたでしょ、なのに何で。」

佐藤 「ああ・・・普通か。」

リツ 「なに？」

佐藤 「いや、何でも？」

リツ 「嘘でしょ。なんかあるって顔してる。」

佐藤 「ははっ……。いやさ、やっぱ普通に見えるよね、俺って。ほんと普通なんだよ、普通の人間でさ。……世の中には、自己中心的っていうか、人の心がないっていうか、そういう訳の分からない人間もいるじゃん？」

リツ 「ああ、まあ。」

佐藤 「それ、うちの親なんだよね。そういう人たちだったの。」

佐藤、荷物に腰掛ける。

佐藤 「別に犯罪に手を染めてたとか、人を殺したとかそういうんじゃないけど。例えば、道にゴミをポイ捨てとか？普通に通にできる人たちだった。」

リツ 「え、ポイ捨て？」

佐藤 「へへっ。こういうとしようもない感じするけど、なんていうの、みんなが持っているような倫理観？的なのが無い人たちで。ずっと違和感があった。だから小さい頃は、親が捨てたゴミ、こっそり持ち帰って家で捨てたりして

た。」

リツ 「いい子じゃん。」

佐藤 「そうでしょ？自分でも思う。なんであんな親から、俺みたいな普通の人間が生まれたのか分かんなくて。でも、時々思ってたんだよ。俺もああいう風な人間に生まれてたら、こんなに悩まずに生きていけたのかなって。だから知りたいと思っただのかも、あいつらみたいな人間が何を考えて生きてるのか。」

リツ 「……それが、組織に入った理由？」

佐藤 「いや……そういうわけでもないかも。ビルを爆破したり、一般人殺したり、正直ドン引きだし。俺には多分一  
生理解できない。ただ……。」

リツ 「ただ？」

佐藤 「……はい！もういいでしょ、こんな話。ねえリツ君も手伝ってよ、夕方までには倉庫綺麗にしたいからさ。」

リツ 「嫌だね。」

佐藤 「え？リツ君、どこ行くの？」

リツ 「部屋。眠いから寝るわ。」

佐藤 「ちょっと、俺一人で掃除するの？」

リツ 「頑張ってるね、佐藤先輩。」

『革命』 作：ポチ子

佐藤

「ええー・  
・  
・  
もおー・  
・  
・  
。」

— 終わり —